



北海道公立大学法人
札幌医科大学
Sapporo Medical University

札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor*

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	医学部・保健医療学部 1 年生を対象とした利尻島における離島地域医療実習・ゼロからの出発・
Author(s)	山田, 恵子; 高橋, 延昭; 宮下, 洋子; 仲田, みぎわ; 石川, 朗; 片倉, 洋子; 田野, 英里香; 佐原, 弘益; 明石, 浩史; 相馬, 仁; 丸山, 知子; 今井, 浩三
Citation	札幌医科大学保健医療学部紀要, 第 12 号: 37-43
Issue Date	2010 年
DOI	10.15114/bshs.12.37
Doc URL	http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6358
Type	Journal Article
Additional Information	
File Information	n134491921237.pdf

- ・コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- ・利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- ・著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

医学部・保健医療学部1年生を対象とした利尻島における離島地域医療実習 - ゼロからの出発 -

山田恵子¹⁾、高橋延昭²⁾、宮下洋子^{*1)}、仲田みぎわ³⁾、石川 朗⁴⁾、片倉洋子³⁾、
田野英里香³⁾、佐原弘益^{\$2)}、明石浩史⁵⁾、相馬 仁⁶⁾、丸山知子^{#3)}、今井浩三⁷⁾

¹⁾ 札幌医科大学医療人育成センター、教養教育研究部門

²⁾ 札幌医科大学医学部附属臨海医学研究所

³⁾ 札幌医科大学保健医療学部看護学科

⁴⁾ 札幌医科大学保健医学部理学療法学科

⁵⁾ 札幌医科大学付属情報センター

⁶⁾ 札幌医科大学医療人育成センター、教育開発研究部門

⁷⁾ 札幌医科大学学長

^{*} 現北海道文京大学人間科学部健康栄養学科

^{\$} 現麻布大学獣医学部基礎教育系

[#] 現天使大学看護栄養学部看護学科

利尻島における離島地域医療実習について報告する。この実習は平成20年度から開講された医学部、保健医療学部の1年生を対象とした地域滞在型の実習である。実習は、(1)生き物(命)を知るための「生物実習」、(2)島の暮らしを知る「離島生活体験」、(3)離島保健医療を学び、仲間造りをする「地域医療実習」の三つから構成されている。「生物学実習」はウニを使って発生実験と解離割球実験を行った。「離島生活体験」は利尻島における重要な産業である利尻昆布の加工、整形、ウニの塩水パック詰め体験、さらに、利尻の豊かな自然に触れる目的で、夜の森でのコウモリ観察、夕日観察、島一周散策などを行った。「地域医療実習」では両学部混成グループで訪問看護ステーション、デイサービスセンター、特別養護老人ホーム・老人保健施設、小学校を訪れ、見学、対象者とのコミュニケーションを通して、島の人々の生活と健康問題との結びつきを理解した。実習終了後、学生は実習前にたてた自己目標に従って、実習全体に対する振り返りを行った。この実習の特徴は『体験を通して学ぶ』ことにあり、学生のレポートから一定の成果があがったことが分かった。

<キーワード> 離島地域医療実習、生物実習、離島生活体験

“Community Health Care Practice on Rishiri Island” for students in their first year in the School of Medicine and School of Health Sciences, Sapporo Medical University - Starting from Scratch -

Keiko Yamada¹⁾, Nobuaki Takahashi²⁾, Yoko Miyashita¹⁾*, Migiwa Nakada³⁾, Akira Ishikawa⁴⁾,
Yoko Katakura³⁾, Erika Tano³⁾, Hiroeki Sahara²⁾\$, Hirofumi Akashi⁵⁾, Hitoshi Sohma⁶⁾,
Tomoko Maruyama³⁾#, Kohzoh Imai⁷⁾

¹⁾ Department of Liberal Arts and Science, Center for Medical Education, Sapporo Medical University

²⁾ Marine Biomedical Institute, School of Medicine, Sapporo Medical University

³⁾ Department of Nursing, School of Health Science, Sapporo Medical University

⁴⁾ Department of Physical Therapy, School of Health Science, Sapporo Medical University

⁵⁾ Information Center of Computer Communication, Sapporo Medical University

⁶⁾ Department of Education Development, Center for Medical Education, Sapporo Medical University

⁷⁾ President of Sapporo Medical University

present address:

^{*} Department of Health and Nutrition, Faculty of Human Science, Hokkaido Bunkyo University

^{\$} Laboratory of Biology, Azabu University School of Veterinary Medicine

[#] Department of Nursing, School of Nursing and Nutrition, Tenshi College

We report the program of “Community Health Care Practice on Rishiri Island”. This is a community-based program for students in their first year in the School of Medicine and School of Health Sciences, Sapporo Medical University. It is composed of three parts: (1) experiments on the early development of sea urchins to understand the lives, (2) life experiences such as the processing of Rishiri kelp(Konbu), sea urchin packing in salt water, observation of bats in the forest night, watching the sunset and going on a walk around the island to learn about life on the remote island and (3) community health care practice at the home-visit nursing station, day-care facilities, special elderly nursing homes/healthcare facilities for the elderly and elementary school to understand the relation between the life and the health problems of inhabitants of Rishiri. After the program, students wrote reports about their objectives, self-evaluation, learning & impressions. It was found that the students got good results in their understanding of life on the remote island of Rishiri through the experience in this program.

Keywords : Community health care practice on remote island, Biological experiment, Living experience on remote island

Bull. Sch. Hlth. Sci. Sapporo Med. Univ. 12:37-43 (2010)

はじめに

全国的に地域医療の崩壊が叫ばれているが、北海道においても既に8割を超える市町村で出産ができなくなる等、地域医療が深刻な事態に陥っている。本大学では医学部、保健医療学部共に、地域医療を視野に入れた実習を重視しており、平成16年から、文部科学省現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム（現代GP）によって、地域医療を志向する学生の育成を目指した「地域密着型医療実習」が、医学部、保健医療学部の2-3年生を対象に開始されている。道東の別海町を北海道内の医療過疎地域のモデル地区として、根釧地区（別海町、中標津町、釧路市）で現地滞在型の実習を行ってきた^{1) 2)}。大学として、このプログラムを継続し、さらに発展させていくことを目的として、平成19年度文部科学省特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）に「学部一貫教育による地域医療マインドの形成」として採択された。特色GPはこれまでの学年単位の単独の取り組みであった「地域密着型医療実習」を発展させたもので、地域滞在型実習・チーム体験実習を拡充させるにあたり、その基盤となる知識や関心を喚起する科目として、1年次から4年次に渡って両学部共通科目として「地域医療合同セミナー」が開講されているのが特徴である。ここに報告する離島地域医療実習は、この特色GPの教育の一部であり、『ウニの発生観察を通じて生命現象を学ぶ』、『地域医療の現場を訪れ、見学研修する』という7年間に渡って医学部単独で利尻島で行われてきた『臨海実習』が基になっている。今回の実習は医学部、保健医療学部（看護学科、理学療法学科、作業療法学科）に所属する学生の混成チームによる地域滞在型の実習であり、入学後5ヶ月の大学生活を行っただけの1年生を対象としているのが特徴である。平成20年8月17日から22日の日程で行われた、初めての離島地域医療実習について紹介する。

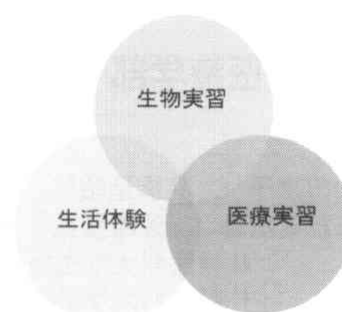
実習のねらい

図1に示したように、『臨海医療実習』を発展させ、生き物（命）を知るための「生物実習」、島の暮らしを知る「離島生活体験」、離島保健医療を学び、仲間づくりをする「地域医療実習」の三本の柱を立てた。「生物実習」、「離島生活体験」、「医療実習」という一見関連がないように思われる3種類の学習内容から、医療者として重要な生命への畏敬の念、多様な地域・生活・人間のありように対する感性が養われることをねらいとしている。

実習の方法

1. 参加学生

参加学生は、医学部医学科17名、保健医療学部看護学科



- ・生き物（命）を知る
- ・島の暮らしを知る
- ・島の仕事を体験する
- ・離島保健医療を学ぶ
- ・仲間づくりをする
- ・ボランティアをする

図1 離島地域医療実習の学習目標

9名、理学療法学科5名、作業療法学科4名であり、両学部の学生混成の小グループを編成して学習した。全員が、「はじめに」のところで述べた特色GPの教育の一部である「地域医療合同セミナーⅠ」の受講生であった。「地域医療合同セミナーⅠ」は1年次から4年次に渡って両学部共通科目として開講されている「地域医療合同セミナー」の1年生を対象とした科目であり、地域医療を展開する上で必要となる基本的な知識と、パートナーシップを形成する基本的な態度を獲得すること、北海道の抱える保健医療の課題への理解を深めることを狙いとしている。この目的のため、学生は「離島地域医療実習」参加に際し、「利尻島の暮らし」や「利尻島の健康と保健・医療・福祉」に関する事前講義を受け実習に臨んだ。

2. 実習場所

北海道の北部（図2）、日本海上に位置する利尻島で実施された。利尻島は、周囲約60km、面積182.11km²のほぼ円形の島で、札幌から約300kmのところに位置している。利尻島には、昭和43年に東利尻町（現利尻富士町）鰯泊に札幌医科大学附属臨海医学研究所が開所され、平成13年からは本プログラムの基となった「臨海実習」が医学部1年生を対象に行われてきた。

3. 開講時期と実習スケジュール

平成20年8月18日（月）から8月22日（金）の5日間に渡って実施された。実習スケジュールを図3に示した。

4. 実習内容³⁾

「生物実習」
多細胞生物の根幹は発生にあり、ヘッケルが言っているように「個体発生は系統発生を繰り返す」⁴⁾。そのため、発生現象の理解は生物を深く広く知ることにつながると考

え、ウニを使つての発生実験が行われた。実験で扱う棘皮動物のウニは哺乳動物と同じ後口動物群に属し、調節卵である。また人工授精が容易である、卵割の同調性が良い、胚が透明で内部の観察が容易であることから、受精や発生の観察に適した材料である。しかし、ウニの放卵、放精の時期が決まっているため、実習時期は限られる。ウニを使った生物実習はウニの受精、正常発生の過程を観察し、発生における軸形成の重要性を学ぶ「発生実験」と、初期発生における割球の全能性の有無を学習する「解離割球実験」のふたつから構成され、学生は午前と午後に分かれ、2つの実験を行った⁴⁾。生活体験の日に利尻町ウニ種苗生産センターで、実習では日数の関係で観察できないブルテウス以降のウニ幼生の観察(6腕足8腕足ステージ)を行った。実習の様子を図4に示した。

「離島生活体験」

離島医療従事者の使命は、生活の中から推量される疾病に対する予防医療のあり方、離島という地理的条件のなかでの緊急医療体制のあり方を常に考えて行くことである。そのような施策を考案する上で必要となる離島での生活様式の体験学習を行なった。利尻島では多くの住民が、昆布漁とウニ漁によって生計を立てている。利尻島での代表的な産業である(1)昆布加工(昆布の縁切り、整形の体験)、(2)ウニ食部の塩水パック詰め体験を行った。

「医療実習」

健康課題は医療の対象者の生活の中から生じることが多い。この実習では、都市部とは異なる離島の自然・生活状況を体験的に理解し、そこに生じている健康課題、予防医療や緊急医療体制など離島における医療の特徴について理解する事を目的としている。チーム医療では、医療仲間の仕事の内容を知る事が大切である。そのため、将来の医師、看護師、理学療法士、作業療法士の混成チームとし、将来

めざす仕事とは異なる分野の体験を行った。実習体験先の名称を表1に、所在地を図2に示した。家庭を訪問する実習、診療所での実習を除き、教員1名を各施設に配置した。「講演会」

大学における事前学習として、利尻町平野保健師による「離島の健康と医療」の講義が行なわれた。実習期間中、高橋保健福祉事務所利尻支所長による「利尻島の医療事情について」、道立鬼脇診療所の近藤先生による「利尻島2008の夏」、国保中央病院(島唯一の総合病院)中川院長と不破事務長による「地域医療に必要なもの」、「利尻島国保病院の概要と離島における緊急搬送の実績」、利尻町博物館学芸員である西谷榮治氏による「島が島であるために」の講演が行われた。

「自然観察、懇親会、その他」

コウモリ観察：利尻町立博物館の佐藤雅彦学芸係長の指導によるコウモリ観察会が2晩に分けて行われた。学生は2グループに分かれ、ガの集まる街灯の下と森の中にあらかじめ網を張った場所で観察した。

夕日見学：ボランティアの案内で、夕日が見える丘での夕日観察会が行われた。

オタドリ湖、姫沼散策：オタドリ湖、ならびに姫沼一周散策を行った。

利尻富士町役場の方々との懇親会：実習最終日に、利尻富士町と、学生、引率教員との懇談夕食会が行われた

実習の展開

「生物実習」

医学部の学生はすでに前期の生物学実験で「発生実験」を体験しているので、グループは医学部生と保健医療学部生の混合グループとしたが、お互い教え合い、実習はスム

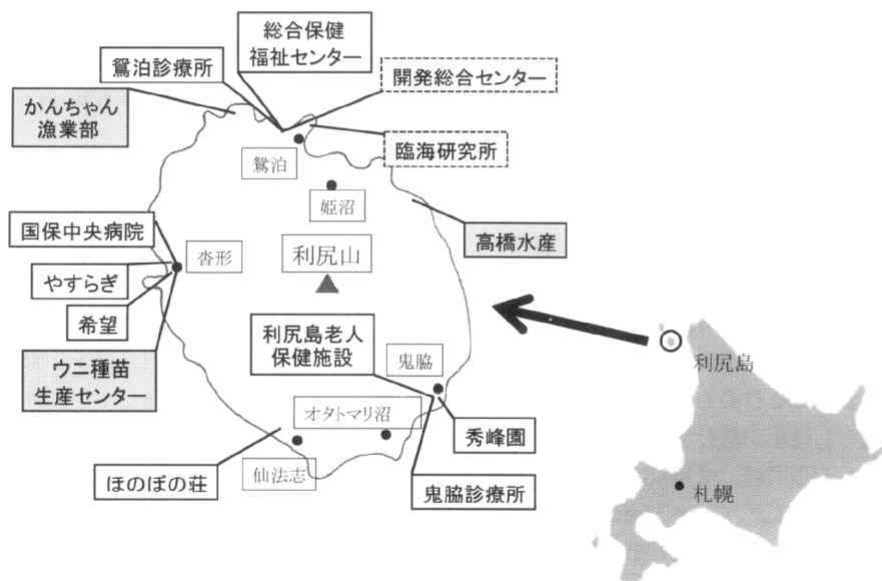


図2 利尻島における生物実験、生活体験ならびに医療実習の場所

1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
8月18日(月)	8月19日(火)	8月20日(水)	8月21日(木)	8月22日(金)
札幌から利尻島へ	生物実験の日	生活体験の日	医療実習の日	利尻島から札幌へ
6 起床 7 朝食 8 札幌出発 (7:45) 9 利尻島 渡島支庁 (17:10 着) 10 利尻島 渡島支庁 観光総合センター 11 夕食 12 夕食 13 夕食 14 夕食 15 夕食 16 夕食 17 夕食 18 夕食 19 夕食 20 夕食 21 夕食 22 就寝	6 起床 7 朝食 8 朝食 9 朝食 10 朝食 11 朝食 12 朝食 13 朝食 14 朝食 15 朝食 16 朝食 17 朝食 18 朝食 19 朝食 20 朝食 21 朝食 22 就寝	6 起床 7 朝食 8 朝食 9 朝食 10 朝食 11 朝食 12 朝食 13 朝食 14 朝食 15 朝食 16 朝食 17 朝食 18 朝食 19 朝食 20 朝食 21 朝食 22 就寝	6 起床 7 朝食 8 朝食 9 朝食 10 朝食 11 朝食 12 朝食 13 朝食 14 朝食 15 朝食 16 朝食 17 朝食 18 朝食 19 朝食 20 朝食 21 朝食 22 就寝	6 起床 7 朝食 8 朝食 9 朝食 10 朝食 11 朝食 12 朝食 13 朝食 14 朝食 15 朝食 16 朝食 17 朝食 18 朝食 19 朝食 20 朝食 21 朝食 22 就寝

図3 離島地域医療実習日程表

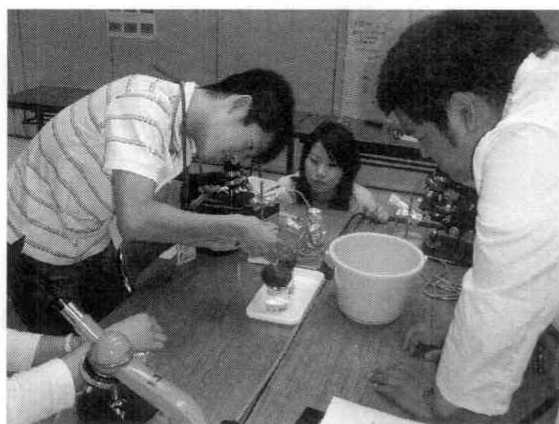


図4 離島地域医療実習における生物実習

ーズに行われた。「発生実験」ではウニから採卵、採精を行い、採取した卵、精子を用いて受精卵を得た。受精の過程-受精膜の形成、卵細胞、透明層の形成-を確認後、ウニの初期発生（2細胞期-卵胚期-囊胚期-ブルテウス幼生）を観察した。ブルテウス幼生以降の発生過程はウニ種苗生産センターで行った。「解離卵割実験」両学部生共に初めての経験であった。卵割した割球を解離し、その発生を追跡することにより、ウニの初期発生における各々の割球の全能性の有無を理解することを目的とした。卵は受精が完了すると受精膜を形成し、発生が進行するが、割球を解離するため、卵の周囲にある透明層、受精膜、ゼリー層を除く目的で、受精卵を直ちに Ca^{2+} ・ Mg^{2+} 欠如海水に移し、受精膜、透明層等を除去した。卵割の過程を観察し、2細胞期、4細胞期になった時期に割球を解離し、通常の海水中で発生を観察した。いくつかのグループが割球の分離に

表1 離島地域医療実習における医療実習先

1. 自宅で生活する人々を支える
・ 訪問看護ステーション やすらぎ (杏形)
・ 利尻富士町総合保健福祉センター (鷺泊)
・ 利尻富士町鷺泊診療所 (鷺泊)
2. デイサービス
・ 利尻町特別養護老人ホーム
利尻町デイサービスセンター ほのぼの荘 (仙法志)
・ 利尻町高齢者生活福祉センター 希望 (杏形)
・ 利尻富士町立特別養護老人ホーム 秀峰園 (鬼脇)
利尻富士町デイサービスセンター (鬼脇)
3. 特別養護老人ホーム・老人保健施設
・ 利尻町特別養護老人ホーム ほのぼの荘 (仙法志)
・ 利尻島老人保健施設 (鬼脇)
・ 利尻富士町立特別養護老人ホーム 秀峰園 (鬼脇)
4. 小学生の生活
・ 利尻富士町立鷺泊小学校 (鷺泊)

() : 所在地

成功し、2細胞期の解離割球（一卵性双生児）の発生を観察できた。しかし、氷上（0℃）での発生観察であったため、発生の進行が遅く、十分な観察ができなかった。恒温槽（16℃）の設置は今後の課題である。実習は初日に行われ、学生は毎日観察を続け、スケッチを行った。最終日のフェリーに乗る直前、発生が進んだウニを海に放流し、生物学実習を終了した。

「生活体験」

コンブの加工倉庫で、昆布の縁切り、整形を体験した。作業をしている島の女性たちから切り方の指導を受け、学生たちは神妙な顔をして昆布切りを行った。街で製品となった昆布しか見ていなかったが、昆布は部位により用途が異なること、きれはしのような昆布もラーメンのダシ用の製品になることなどがわかった。午後からはウニ食部の塩水パック詰めを体験した（図5）。学生はパックの空気を抜くのに苦労していたが、作業しているおばさんたちが親切に指導して下さった。利尻山から流れてくる冷たい水がこの技術を可能にしている事も知った。

「医療実習」

実習を行う学生は、殆ど専門の学習を行っていない時期の1年生であるため、医療実習は体験・見学型とした。実習先は大きく（1）自宅で生活する人々を支える施設、（2）デイサービス、（3）特養・老健施設、（4）小学生の生活の4つに分類される。表2に示した学習目標・学習課題のもとに実習を行った。学習目標・学習課題は、事前に担当教員による2度の訪問、電話や手紙による打ち合わせを経て決定されたが、具体的な活動内容に対しては、施設に一任した。

（1）自宅で生活する人々を支える施設

訪問看護ステーションでは1名の看護師に2名の学生が同行し、昼食の介助を含めた訪問看護の仕事を体験した。保健福祉センターの実習では、保健師とともに家庭を訪問



図5 離島地域医療実習におけるウニの塩水パック詰め体験

し、ケアプランの評価やモニタリングがどのように行われるのかを体験した。篤泊診療所では、医師の背後に座って診察の様子を見学や、待合室にいる患者と話をした体験を行った。

(2) デイサービス

ほのほの荘では、利用者との会話の他、利用者と共にオセロゲームや花札、体操等を行なった。希望、秀峰園では利用者とのレクリエーション、昼食の準備、食事介助を体験した。利尻富士町デイサービスセンターではデイサービスでのレクリエーションに参加して、利用者との交流を計った。

(3) 特養・老健施設

ほのほの荘では、車いすの移乗や移動の体験、食事の援助体験を行った。実習終了時にデイサービスを体験した学生とともに指導員を含めたカンファレンスが持たれた。利尻島老人保健施設では入所者の8月生まれの誕生会ならびにレクリエーションに参加した(図6)。

(4) 小学生の生活

最初に養護教諭から子供たちの健康についてお話をいただき、島の子供の健康の特長として肥満と虫歯保有者の数が多いことがあげられた。当日体育館で開催された「河辺バンド」の演奏会への参加や体育の授業でバレーボールを一緒にやり、休み時間には校庭を小学生と走り回った。「講演会」

実習期間中以下の5つの講演が企画された。利尻島に到着直後、「利尻島の医療事情について」北海道宗谷保健福祉事務所利尻支所長、高橋裕之氏が島における医療事情の概要について話された。実習3日目に、学生は3つの講演を聞いた。最初に北海道立鬼脇診療所長、近藤剛先生が「利尻島2008の夏」と題して、先生自らが撮られた写真を使い、離島での診療にかける想いを学生に語られた。当初救急医療にたずさわっていたが、患者さんとじっくりお話をしながら病の克服を考えたいと考え、地域医療の道を選ばれた。愛媛の出身であるがご両親も利尻島に呼ばれ、地域に根ざした診療をされている。鬼脇での講演ののち、杏形の利尻島国保中央病院に移動し、2つの講演をきいた。

表2 離島地域医療実習における医療実習先別学習目標と学習課題

1 自宅で生活する人々を支える	
学習目標	健康課題を持ちながら自宅で生活する人々を支える
学習課題	① 健康課題を持ち、自宅で生活する人々とそれを支える家族の様子を知る ② 病気とともに地域で生活する人とその家族の支援を見学する ③ 訪問や診療所での仕事における医療従事者の地域医療マインドに触れる
2 デイサービス	
学習目標	デイサービス利用者の生活を知る
学習課題	① 利用者のデイサービスへの期待を知る ② 具体的なケアの一部を体験する ③ 利用者が楽しい、あるいは今日一日良い日だったと思えるよう、高齢者に関わる ④ 地域医療従事者の地域医療マインドに触れる
3 特別養護老人ホーム・老人保健施設	
学習目標	特別養護老人ホーム・老人保健施設で過ごす人々の生活を知る
学習課題	① 入所者とともに一日を過ごし、特別養護老人ホーム・老人保健施設に対する高齢者の期待を知る ② 具体的なケアの一部を体験する ③ 入所者が安心できるコミュニケーションを試みる ④ 地域医療従事者の地域医療マインドに触れる
4 小学生の生活	
学習目標	利尻島の小学生の生活を知る
学習課題	① 小学生の学校生活を知る ② 島での生活・遊び・親の仕事に関する関心や手伝いについて知る ③ 島の子どもたちの健康問題について知る

一つ目は、事務長、不破豊氏による「利尻島国保病院の概要と離島における緊急搬送の実態」で、利尻島唯一の総合病院である国保病院のおかれた現状、問題点、ヘリコプターによる緊急搬送の実情についての詳しいお話だった。2つ目は病院長、中川紘明先生の「地域医療に必要なもの」である。中川先生は地域医療を始める前の自己目標として自分なりの目標を立てる事を学生に勧めた。① 地域をまず視てみる、② 地域の中に出向いていく、③ 地域でがんばっている人たちを知る、④ 地域の資源を探してみる、⑤ 地域の人から話を聞いてみる、⑥ 地域を愛することから始まる。先生のこれらの実践のお話は学生に多くの示唆を与えたと同時に地域医療においてそこに住む人々の生活を理解することが大切であるとした本実習の理念とも合致したものであった。医療に関する講演に加え、実習2日目には、利尻町立博物館学芸課長、西谷榮治氏の「島が島であるために」の講演会が持たれた。利尻島は古くから、航



図6 離島地域医療実習における医療実習体験

海者たちにランドマークとして慕われていたこと、1807年に利尻島はロシア人に襲撃され、その脅威から身を守るために、会津藩が北方警備にあたったが、当時利尻島には野菜類がなく、栄養失調によって多くのものが死亡したが、その墓が利尻島の各地にあることなどを話された。学生は、その墓の一つを生活体験の合間に訪れた。墓石は郷里の会津から運んだといわれている。島の人々は感謝を込めて8月下旬に、会津藩士を弔う。また、日本初の英語教師マクドナルドが利尻島から日本に上陸し、彼の生徒がペルー来日のときに活躍した話を聞き、小さな島と世界とのつながりを感じた。

「自然観察、懇親会、その他」

コウモリ観察

森の中でほぼ15年に亘り道北のコウモリの分布と生息調査を観察・記録し続けている佐藤雅彦先生による説明が行われ、「林道の暗闇では、コウモリとの一体感を考え、静寂の中で闇と自分とを対峙して欲しい。」と語られた佐藤先生の言葉を胸にして、街灯の下と森の中にあらかじめ網を張った場所の2カ所での観察が行われた。コウモリの飛翔状況調査はバットディテクター(25kHzの超音波検出器)を用いて行なわれたが、残念ながら強い風のため、コウモリの餌となるガがあまり飛ばず、コウモリに出会う事は出来なかった(飛んでいるのを見る事ができたグループもある)。島には5種類ものコウモリが生息していることなどの話を聞き、観察会終了時に、コウモリの剥製を見せていただいた。

オタドリ沼、姫沼一周の散策、夕日見物

地図でわかるように、利尻島の中心に利尻山がある。そして島のどこにいても山はそれぞれの顔で我々に接してくれる。オタドリ沼、姫沼では、水に映る利尻山を堪能した(図7)。実習期間中、前半は山の頂上が雲に覆われていたが、後半、山の全貌を見る事が出来た。

島の人々とのふれあい

実習最終日に、利尻富士町と学生、引率教員との懇親会が行われた。役場の方々が学生たちにイカやホタテを焼い

て振る舞って下さった。島に別れを告げる朝、学生たちは利尻富士町の役場を訪ね、町長以下お世話になった方々へ感謝のご挨拶をして、島を後にした。さらに、地元ボランティアによる「なんでも相談コーナー」が開発総合センターで開設された。これは学生が初めて来島して町のことなど判らないことが多いであろうという配慮のもとに企画されたものである。他に、町のボランティアによる「うにぎり」やからあげなどの昼食のサービス、朝食用のパンと牛乳の差し入れ、ミニウニ丼の差し入れ、コンプのお土産など島の方々の多くの応援があった。

考察および今後の課題

以上、利尻島で行われた離島地域医療実習について述べた。本実習は(1)入学してからわずか5ヶ月後の夏に1年生を対象とした実習であること、(2)医療実習のみならず、生物学実習、生活体験実習の3本柱の基に行われたこと、(3)医学部、保健医療学部で学ぶ学生の混成チームで行われた実習であること、(4)実習先が大学のある札幌からの距離が遠い、などの特徴を持った実習である。(1)で述べたように、この実習は大学入学後わずか5ヶ月後の8月に行われる1年生を対象とした実習である。実習の段階で、学生は殆ど専門の教育に触れていない。そのため、実習のキャッチフレーズを『ゼロからの出発』とした。学生は当初この実習の内容を見て、地域医療にどのように生物実習や生活体験がかかわっているのかを理解しにくいようだった。実際実習後のレポートで「なぜこの実習でウニの発生実験をするのか分からない」と述べた学生もいた。しかし、大部分の学生がウニ発生を長期間観察するという、大学での実習では経験できない実習を行い、発生が進んだ受精卵が動き出す瞬間に立ち会うことができ、生命について考えることができたこの実習に意義を感じていた。さらにウニの発生の学習はヒトの発生の理解に寄与し、さらにウニ卵割球の全能性についての学習は再生医療の理解にもつながると考える。

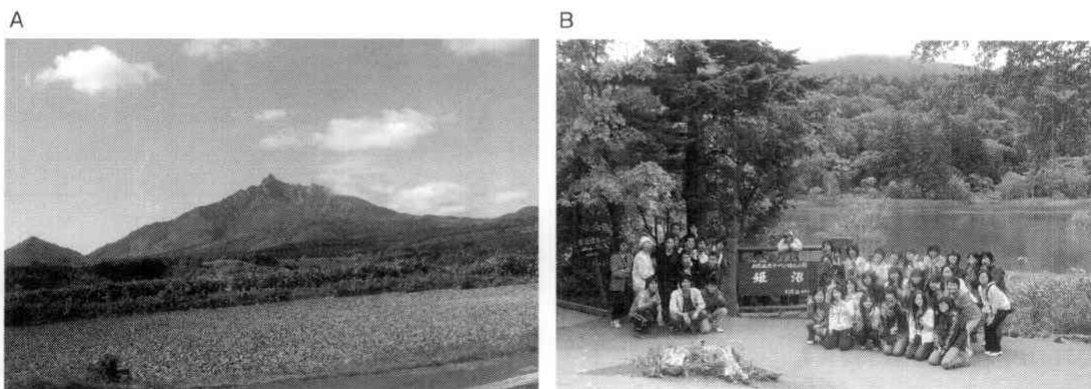


図7 杓形から見た利尻山(A)と姫沼散策での参加者全員での記念撮影(B)

生活体験と医療とのかかわりについては、中川先生がその関係をみごとに講演の中で示して下さいました。地域医療は『地域を良く知る事から始まる』という言葉に学生が大きくうなずく姿を見ることができた。著者らもてきぱき状態でのこの実習を作り上げてきたが、中川先生のお話の内容は本実習の理念と合致したものであり、方向が間違っていないことを知ることができた。

医療実習は、様々な施設が学生を受け入れて下さった結果、医学部や理学療法学科、作業療法学科に属する学生が大学の実習では経験できない訪問看護ステーションや保健師が行うケアプラン作成のための家庭訪問の体験をすることができた。殆どの学生が実習開始直後は緊張し、患者や利用者、小学生との交流がうまくいかなかった様子だったが、指導者の指導を受けながら一生懸命コミュニケーションを取ろうと努力する姿が印象的であった。

両学部合同で実施されたことに関して、殆どの学生が「良いこと」として評価していた。異なる専門職のものがお互いの専門を認め合いながら助けあい、共に成長しチームを形成していく、いわゆる「相互依存的」なありかたを漠然とイメージしていることが学生のレポートの分析⁶⁾からわかった。両学部合同講義の必要性が叫ばれながら、実際にはなかなか実現されていない実情の中で、1年次から両学部が共同で体験するこの医療実習の意義はもう少し評価されて良いのではないかと考える。

参加学生はバスとフェリーを乗り継ぎ、約9時間かけて利尻島に到着し、「利尻島は遠い」ことを実感できた。島で対応できない病気の場合、島民は稚内や札幌まで出てくる事があるという話を講演で聞いたが、島民が札幌まで出かけてくる時の苦労が学生たちは少しだけ理解できたのではないかと考える。準備や移動の際、札幌と利尻のこの『距離』が問題となったこともあったが、実際実習を行ってみて、『遠い利尻』での実習も意味があるのではないかと考える。

実習で関わりを持つまでは、利尻島に対して殆どの学生は、「利尻富士、利尻昆布、ウニ」というイメージしか持っていなかったと思われる。今回「島が島であるために」の講演を通して、利尻島の歴史を深く知る事が出来た。

今後の課題として、日程・スケジュールの過密さ、宿泊施設の貧困さ（学生は床に寝袋で就寝）、食事内容などの問題が浮かび上がった。また、実習後の学生による報告会を持つ事が出来なかったが、学生の体験や学びを報告する場があっても良かったのではないかとという声が聞かれた。そのことが離島地域医療実習に対する学生や学内の教員たちの関心や理解につながると思われるので、次年度の重要な検討課題であろう。

利尻島の人々は皆一様に暖かく我々を迎えてくれた。また、地域医療実習に期待する思いもひしひしと感じた。『ゼロからの出発』であるこの地域医療実習は、2、3年時に西紋別、根釧地区で行われている「地域密着型医療実習」

につながっている。これらの実習に参加した学生の中から、将来離島を含めた地域での医療に飛び込むものが出てきたとき、この実習の真の評価がなされるのだろうか。単にイベントのひとつで終わらせてはいけないとの思いを強く持った実習であった。

謝 辞

本実習を行うに当たり、利尻島でお世話になった役場や多くの施設の方々、ボランティアの方々に深く感謝致します。自主的に本実習に参加された両学部学生に感謝致します。また、写真の掲載を快く承諾いただきました施設や学生の方々に感謝致します。本実習は事務局のメンバーの協力なしには実行できませんでした。事務局の醗茶直美、佐藤みちよ、三浦千鶴の皆様へ感謝致します。本実習は特色ある大学教育支援プログラム「学部一貫教育による地域医療マインドの形成」の一部であり、文部省の支援のもとに行われましたことを感謝致します。

文 献

- 1) 札幌医科大学医学部・保健医療学部、現代GP「地域密着型チーム医療実習」報告書 平成16～17年度(2006)
- 2) 札幌医科大学医学部・保健医療学部、現代GP「地域密着型チーム医療実習」報告書 平成17～18年度(2007)
- 3) 「札幌医科大学離島地域医療実習」平成20年度実習書
- 4) 木下清一郎：細胞のコミュニケーション、生命科学シリーズ、裳華房、東京、1993、p7-63
- 5) 「軸性の学習とウニクローン胚の作成」平成20年度生物実習書（2008）
- 6) 仲田みぎわ、山田恵子、高橋延昭他：利尻島における離島地域医療実習から得た学生の学び－参加学生の実習後レポートの分析－ 札幌医科大学保健医療学部紀要12：27-35、2009